

解讀文

資料 1

為歲暮之嘉祥

小袖五贈給之

欽然之至候、委細

酒井雅樂頭可述候、

謹言

正月十一日 家綱

紀伊
大納言殿

資料 2

為歲暮之佳祥
小袖三重到来
欽入候、委曲
土屋相摸守可
述候、謹言

十二月廿九日 綱吉

尾張
中将殿

資料3

為歲暮之佳祥

小袖三被相贈之

依然候、委曲土屋

相摸守可述候、

謹言

十二月廿九日 綱吉

水戸
中納言殿

〔中表紙〕

系譜附録

西丸

御書院番

太田志摩守組

蜷川与三郎

┌

曾我流

書札法式并二字札書伝来之訳

蜷川彦右衛門親熙儀、久保吉右衛門正之門弟二而、曾我

流書札法式・二字札号下馬札書法極意迄皆伝相続

被 仰付、蜷川八右衛門親雄代迄相続御用相勤候、

右書札法式 極意、武家法例二字札之儀者、

室町將軍家方伝之、於

神君御代、先師曾我又左衛門尚祐奉蒙

上意、法例之二字札御門／＼建之候由申伝候、其

後嫡子曾我又右衛門古祐相続仕候、二字札

之大事・本式伝授之義者書札法式

数年執行仕功之上、其大事ヲ知候而

執筆可仕事ニ御座候、尤一子相伝ニ而

外人江右免許定法ニ御座候、若其余、

人故障有之候得者、門人之内家之人

筆跡を写可伝授急用事ニ御座候、

是を刑^(形)伝授卜申候、本式之伝授二而者
無御座候

大猷公御代、曾我又左衛門古祐奉蒙

上意久保吉右衛門正元江伝授仕候、其頃
御夜詰之節、相伝之次第正元言上仕候処、
弥大切二可仕被 仰含候、其後嫡子久保
吉右衛門正永相続仕候、後年此家断絶仕候

常憲公御代、

天和二壬戌年六月七日、蜷川彦左衛門親熙江相続
被 仰付

同三癸亥年十二月十八日、大手御門其外
御門ノヽ二字札御用相勤申候、嫡子蜷川
彦左衛門親英迄法式相続仕御用相勤
申候

宝永五戊子年六月、右伝来之書物座
右鈔其外共不残 御城江差上申候、二字札
之義兼而親英故障等之節御用向為相勤
御右筆飯高七左衛門・団安左衛門江形伝授
仕候様稻垣对馬守殿伝授仕置候

文章公御代、親英江二字札伝授来候次第

御尋御座候、自古来相伝之訳以書付申上、其節
二字札本伝断絶二可及間、門弟二無御座候候共奉
蒙

上意候者早速伝授仕度旨密二奉願候処、
其後奥御右筆組頭并出源左衛門江二字札書法
伝授仕候様、稻垣对馬守殿達、依之数日参会
仕、本式之伝授仕候

正徳四甲午年源左衛門儀死、是より嫡家之伝者
断絶、蜷川八右衛門親和義、父蜷川彦右衛門^(左)
親熙方書札法式相伝仕、師範仕、二字札

書法者兄蜷川彦左衛門親英ヨリ密伝授仕候

但、二字札書法者従先師一子相伝仕来候処、

親英惣領幼稚ニ付若シ急病等之節者大切之伝授

乱雑紛缺も有之候ハ、古来方相伝断絶之基也ト

親英存念ニ而、先例ニ任、兼而親和江相伝仕置候

右書札伝書座右鈔写和簡札経ト号所持仕、二字札

書法茂密伝授罷在候儀共

文章公達 上聞、

正徳二壬辰年下馬札・下乗札之儀并伝書之内

数ヶ条 御尋御座候処、以書付御請申上、

正徳五乙未年

神君御神忌 御法会之節、於日光山初而

下馬札御用、依之寸法を製、文字之様法ヲ

選、古来法式之通相調申候、夫ヨリ二字札

御用相勤候、親和養子親雄書札・二字札

極意迄相続仕、師範仕候

元文五庚申年八月、東叡山坂門二字札御用

初而被 仰付、夫ヨリ所々御用相勤候

宝曆六丙子年正月、奥御右筆橋本喜八郎敬近江^(周力)

二字札書法伝授仕候、書札伝書ハ親雄方

嫡家蜷川善九郎親贊江相伝仕候、当時師範

仕候

天明三癸卯年八月九日、橋本喜八郎より

親贊江二字札書法伝授被 仰渡、当時

御用相勤候

一八右衛門親和儀、書札伝書座右鈔写親雄江相
伝候

明和七庚寅年、御用向見合ニ可相成ニ付水野
出羽守一覽被申渡候段、奥御右筆組頭曰井

藤右衛門江被 仰聞候ニ付、藤右衛門を以差上候処、
注釈仕候様、

寛政五癸丑年、松平越中守殿、奥御右筆組頭

近藤吉右衛門を以、蜷川善九郎江御沙汰御座候

一彦左衛門親熙代より板行本今川状所持仕候、

親和

享保六辛丑年六月、御見合為御用

有徳公江奉備 上覧候、今ニ所持仕候

一親熙代方代始和鈔公事要略卜号書物所持仕候、親雄

延享四丁卯年、

桃園院 御即位相濟大賞会之儀ニ付、

惇信公 御見合為御用奉備

上覧候、今以所持仕候

右之通御座候、以上

寛政十一年未年

蜷川与三郎（花押）